

虎關師鍊の元亨釋書と日本精神

福 嶋 俊 翁

「夫れ山に富士あり。僧に鍊公あり。鍊公生れて天地の靈粹を稟け、釋書を撰成して、本朝僧史の權輿を爲す」と祖寬は禪家豪求の中に讃賞してゐる。この鍊公こそは東福寺第十五世本覺國師虎關師鍊（一九三八、弘安元年生）（二〇〇七、正平元年寂）其人である。虎關禪師は我が禪門稀に見る博學多識の人で、其の著述は實に十有七種八十餘卷に及んでゐる。就中我が國體の尊嚴を謳ひ護國興禪の大思想を著したものは後醍醐天皇の元亨元年（一九八一）七月に完成した所の元亨釋書三十卷であつて、此の書は虎關禪師が十六年の歲月忍苦刻勵晝夜心血を注いで撰修した純漢文の日本僧史の最初のものである。

今虎關の法嗣令淬の編した虎關の年譜即ち海藏和尚紀年錄、徳治二年（一九六七）の條を見るに山因に師に國朝高僧の遺事を問ふ。師これに泥むあり。山期期（口どもること）し、之に斬めて曰く、公の辨博なる、外方の事に涉りては皆章章悦ぶべし。此の本邦に至つては頗る應對を澁るに似たるは何ぞやと。師慚づるの色あり。此に縁つて深く慨し、異日必ず當に博く國史並に雜記等を考へて以て皇朝釋氏の一經を作るべきことを念ふ。（原漢文）

とあるが、こゝに言ふ所の山とは正安元年八月、元の國から來朝し、虎關禪師が師として教を受け、た一山一寧禪師である。之に依つて見れば虎關禪師は一山の苦言に啓發せられて皇朝釋氏の一經を撰せんと志したのであつて、この皇朝釋氏の一經とは言ふ迄もなく元亨釋書であつて、其の撰述の直接動機はこの時に在ると考ふべきであらう。

或は元亨釋書と所謂皇朝釋氏の一經とは別書であつたと斷ずる學者もある様であるが、元亨釋書以外に之に當る書は元より現存もせず、又他にその記録も無く、日本佛教に關する歴史的の著述としては元亨釋書を措いて他に求めることは寧ろ妥當でないと考へる。

然し乍ら虎關禪師がこの宏著を完成し得た精神は、單に一山の示唆のみでは無く、師自身の深い國家的民族的矜持が其の根底に横はつてゐることを忘れてはならぬと思ふ。と言ふ意味は、一山來朝の當時、虎關は南禪寺の規菴和尚の許に在つたが、直に往いて一山に相見し、自ら惟へらく、

近時此方の庸繇、噪然として例して元土に入る。是れ我國の恥を遺す也。我南游して彼をして秦に人あるを知らしめんのみ。(原漢文。海藏和尚紀年錄、正安元年の條)

といふ風で、日本國民として徒らに外國に畏服する態度を排して、我國佛教の權威を示したいといふ信念を把持してゐたことが考へ合はさるゝからである。尙かうした虎關の態度は釋書の中に、叡山の寛印が其の師源信と共に敦賀に往き、宋より來た朱仁聰と會見した時に、仁聰が壁間に掲げた

婆那婆演底守夜神の畫像を指して源信を試みたことがあり、源信は直に華嚴經に在る善財讚嘆の偈を憶うて、筆を把つて像の上に、「見女清淨身、相好超世間」と題し、寛印に次の句を書せよと命じ、寛印は亦「如文珠師利、亦如寶山王仁」と書したので、朱仁聰は之を見て「大藏は皆二師の腸胃なり」と感歎したことがある。虎關は之を賛して、

信、印の二師は侮を禦くの才か。彼の仁聰は信の德義を嚮ぶと雖も、夜神を指して言を爲すなり畏域の人亦此の方の學徒を嘗むるなり。二師若し記せずんば、殆ど邦の辱を貽さん。（原漢文）

と言つてゐることからも想像される様に、師は實に日本佛徒として、その自尊を傷けることを大いに恐れ、日本國民として威信を害せざらんことを常に考へてゐたのである。この虎關の思想は徒らに消極的な概念的なものではなくて、實際に之を自らの生活の中に示して人々の覺醒を求めつゝあつたのである。その一例を擧げるならば、虎關の文集たる濟北集の中の、來朝の禪僧明極楚俊に與へた書翰の一に、

某僧史を修むるに縁つて古記を閱るに、我が達磨祖の本邦に遊ぶこと詳なり。始祖の梁に入りし時、南嶽思大親しく示誨を承く。祖荐りに此の方の游化を告ぐ。故に思大上邦に嶽降して位監撫に登る。憲章を製裁して廣く佛事を作す。祖舊盟を講じて片岡に會晤す。臘月朔日便ち遷化を示す。太子百司を將ゐて墳塔を營む。見に和州に在り。方今天下、十月初五、祖忌を修するは叢林

の通規なり。然れども本邦に視るに猶ほ異域と爲す。臘朔は我國の祖忌なり。禪剝修せざるは何ぞや。某臘祖忌を修する者已に十數歳、而して諸方義を見て爲すに勇なるもの鮮なし。今歲天子政化を一新して、尤も心宗に嚮ふ。公妙選に丁つて勝藍に高居す。若能く叢規を振起し、新に臘忌を行はば管に皇上崇法の眷遇に答ふるのみならず、寧ろ明世至化の端緒を輔くるに非ずや。伏して乞ふ之を悉せよ。(原漢文)

とあり、又清拙正澄に與へた書にも同様の懇情を致してゐる。思ふに達磨大師が我國に游化したといふ歴史的の事實は信じ難いであらう。けれども虎關は夙に之を深く信じ、初祖の遷化は我國に於ては十二月一日であるから此の日を以て本邦叢林の初祖忌とすべきである。十月五日を以て行ひ來れるは異邦の制であつて、我邦は我邦の制によらねばならぬと主張し、自ら之を實行してゐた。師の臘朔達磨忌疏にも其の意志を表はしてゐるが、彼の臘朔軸序といふ文には虎關の臘祖忌の偈に、檀林の諸公が賡和し、その三十餘首を得たのを喜び、

臘祖忌は我之を修すること尙し。諸刹未だ應ぜず。今衆和を見る。寧ろ諸方勇爲の漸に非ずや。

喜んで其端に書し、普く學者に告ぐと爾か云ふ。(原漢文)

と書いた程で、師は外國に模倣追隨することを極力排撃し本邦は本邦獨自の立場を守り、其の精神を實踐躬行して已まないといふ強い信念の人であつたのである。故に虎關には宗門の事は故より日

本佛教乃至日本の國體そのもの、尊嚴神聖を深く認識し、萬國に優越せる所以を中外に發揚してゐるのである。

先づ虎關の月本精神國體觀念に就ての眞摯な態度を覗ふべき文献は、元亨釋書の王臣篇であらうと思ふ。王臣篇の冒頭に曰く、

我が國家は、聖君賢臣相次いで間出し、皆能く我が法を欽歆せらる。予博く印度支那の諸籍を見るに、未だ此の方のごと醇淑なるものあらざるなり。何となれば、神世一百七十九萬二千四百七十餘歳。人皇二千年、一刹利種、系聯、禪讓、未だ嘗て移革せず。相胤亦然り。閻浮界の裏、豈是の如きの至治の域あらんや。故を以て佛乘繁茂して、率土和洽なり。君臣崇奉し、歲曆綿邈たり。亦我が眞宗の助化か。(原漢文)

と、是れ正しく我國が世界無双の神國であつて、同時に大乘相應の正法國であることを顯示したものである。然らば何が故に我國が眞に世界無双の神國であり、無比の國體を存するかと言へば、それは我國の歴史が證明する所であつて、自然に基づく三種の神器に對する神聖絶對觀に於て發祥してゐることを力説する所に虎關獨自の面目があり、日本精神の自覺反省を強張してゐるのであつて、この思想は王臣篇の最後の論に詳述されてゐる。

或ひと言ふ、子此の土を謂つて大乘の國と爲すは且らく從はんも、而も又閻浮界至治の域と言ふは、恐らく亦黨するもの有らんかと。余曰く、^た蹇いかな、子が問ふことや。是れ余が公言するの秋なり。君子の言豈苟くもせんや。若し阿黨に涉らば經世と爲んや。若し又不經ならば默するに如かず。夫れ物の自然なるや、天下皆之を貴ぶ。其の造作なるや、世未だ之を重んぜず。吾國史を讀むに、邦家の基は自然に根せり。支那の諸國は未だ嘗て有らず。是れ吾が吾國を稱ふる所以なり。其の所謂自然といふものは三神器なり。三器とは神鏡なり。神劔なり。神璽なり。此の三は皆自然天成に出でたるなり。初、天照太神、天宮に在せしとき、其の孫瓊杵尊を召されて曰く「葦原の中つ國は吾が孫胤統御の地なり。寶祚の隆ならんこと當に天壤と無窮なるべし」と、即ち八咫鏡、八坂瓊、草薙劔を以て之に授けて曰く、「^あ咨、爾、三器五神を從へ下土に下つて、斯の民を照臨せよ。今爾、離索す。故に此の鏡を付す。此の鏡は是れ吾が面を照すの具なり。我が面、常に中に在り。咨、爾、此の鏡を持せば常に我に面^{むか}ふなり。未だ嘗て須臾も離れず。今我汝に付す。汝其れ斯の鏡を汝の居に置け。斯の鏡又能く汝の國祚を鎮めん。其の劔と瓊と皆然り。汝其れ往け。之を慎めよや」と。是を以て之を言へば、我國は東方海極の域なりと雖も、其の統御の靈なる天地の開闢と兆を同うするか。然らば三般の神器何ぞ鑄刻の先に出でて天より降らんや。是れ我が國運の自然なるものなり。彼の支那は葱嶺の東、數十の邦、威、法度を取つて、推して中

國と稱し、又文物の國と言ふ。然れども五帝の世猶傳國の信器なし。況んや三皇をや。又況んや
邃古をや。夏禹に至つて始めて九鼎を鑄、立てゝ國器とす。秦周を奪ふに及んで鼎泗水に没む。故
に始皇千壁を刻して以て璽となす。漢又高祖白蛇を斬るの劍を以て傳國の寶と爲す。爾來劍璽の
二つは國器たり。魏晉以來趙宋に至るまで之を承傳するのみ。故に唐の李白の詩に曰く「一朝寶
位を讓る。劍璽無窮に傳はる」と。彼の支那の大邦と號する者土地曠遠なりと雖も而も受命の符
は皆人工なり。天造に非るなり。我國小なりと雖も基を開くの神なる、器を傳ふるの靈なる、日
を同うして語る可らず。又劍璽の事、兩朝相待たず、而して偶々合ふことは何ぞ。天子の運、彼
此相同じきか。然れども支那は劍璽を傳ふと雖も十數姓を更ふるは、豈其の寶器の人工たる所以
か。我國一種系連縣邈無窮なるは天造自然の器の致す所か。是に因つて言へば、千萬世の後と雖
も、擾奪の虞あらじ。豈其れ天造の神器は佗氏異胃の玩弄する所ならんや。又支那の三皇五帝三
代は我が鷓草うがやの一神の季世なり。天日神に視みらるるに、復古遼邈にして比を爲す可らず。昌ななる
かな。我が國の皇裔五十餘世、年曆二百萬載。一種遞代四夷擾ることなし。其間或は戎羯の覬覦
あれども皆盡く西鄙に糜爛す。無乃帝畿なんぞに近づかんや。夫れ國有りてより以來、蠻夷の攘奪に嬰
らざる者、未だ我が國の純全なるが如きはあらず。(中略)我竺支の事を見るに、我が國の渾厚な
るが如きは、未だこれあらず。是れ區域の靈勝、祖宗の聖武にして、亦吾が佛乘の資輔なり。我

至治の域と言ふ者、其れ然らずや。(原漢文)

この虎關の論こそ實に我が神國の比類なき特異性を啓示した一大文章であつて、その透徹せる史眼は、未だ餘人の視ふに難く、表すに及び得なかつた點を能く貫いてゐるのである。即ち我國の尊嚴なる所以は、他の諸國に於て見得ない三種の神器の儼として傳はることであり、その神器は人工によつて造成せられたものではなくて、天造自然の靈的なものであつて、天地と共に無窮なる意義を有するものである。かうした神器に對する自然觀は、佛教の精神に合致した見識であつて、佛教といふ自然には自然法則即ち自然界の因果律の外に、論理的必然とも言ふべき意味を含んでゐるが、然しこの自然は論理的必然を超えた絶對的な自然及び必然の關係に在るもので、所謂因果を絶した因果を考へるのである。之を佛教では法爾と呼んでゐるのである。この意味が虎關の活精神となつて、その國體觀念を説示するに役立つてゐることは想像に難くない。

顧ふに三種の神器に關する象徴的意義の推測解釋は平安朝の末期頃から現はれ鎌倉南北朝を通じて顯著な發展を遂げ室町時代には一條兼良の神器論なども世に出る様になつた譯である。彼の行基菩薩の撰と傳へられる寶基本紀には眞經津鏡(荒祭宮及び多賀宮の神體)について、

眞と謂ふは天道を以て神と爲す。經とは地道を以て祇となし、津は人道なり。鏡は靈明の心鏡なり。萬物精明の徳なり。……當に之を受くるには清淨を以てし、之を求むるに神心を以てし、

之を現すに無形を以て實を顯はす。故に無相鏡を以て神明の御正體と爲すなり。(原漢文)

とある。之は三神器の一の鏡とは異つてはるるが、兎も角鏡に對する解釋の最初のものと言はれ、其後治承から永仁頃に僞作されたものと言はれる神道五部書などには、玉は曲妙、鏡は分明、劍は平天下の象徴として居り、北房親房の「神皇正統記」に

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに是非善惡の姿あらはれずと云ふ事なし。その姿に従ひて感應するを徳とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を徳とす、智慧の本源なり。この三徳を翕せ受けずしては天下の治まらんこと誠に難かるべし。

といふのは、前の分明、曲妙、平天下の三徳を更に發展させたものとも考へられ、儒教的色彩の多分に含まれてゐることは辭み難いと思はれる。然るに同じく親房の著と傳へられるが、恐らく吉野朝時代の著作と思はれる所の「元元集」には、

轉輪王の世、七寶是に定まる。福力の所感を爲すと雖も、子孫に傳ふるの璽符に非ず。夏商の世九鼎を以て寶と爲す。此の鼎は乃ち夏后氏の鑄造する所なり。秦漢以來、傳國の璽あり。始皇の制する所、李斯の書する所なり。我國の靈器に至つては、神なり。又妙なり。之を傳ふる者は神聖にして之を齋す。(原漢文)

といひ、大分後世の書で「三社託宣鈔」といふものには、

夫れ吾國の寶祚神璽三器は皆天成に出づるなり。昌なるかな。皇裔數世、其統御の靈なるや。天壤の開闢と兆を同うす。是れ國運自然より出づるものなり。……我國一種系連縣邈無窮なる者は、天造自然の器出でて致す所なり。開基の神、傳器の靈、竺支同日にして論すべからず。(原文)

とあるのは、全く虎關の神器觀其儘を繼承し居るのである。北畠親房は又神皇正統記に、

中にも鏡を本とし、宗廟の正體とあふがれ給ふ。鏡は明を形とせり。心性明なれば慈悲決斷はその中にあり。又まさしく御影をうつし給ひしかば、深き御心を留め給ひけんかし。天にある日月より明なるはなし。仍て文字を制するにも日月を明とすといへり。わが神大日の靈にましませば、明德を以て照臨し給ふ事、陰陽におきてはかりがたし。冥顯につきて頼みあり。君も臣も神明の光胤を受け、或はまさしく勅を受けし神達の苗裔なり。たれかこれを仰ぎ奉らざるべき。

と述べてゐるが、此の思想も矢張虎關の自然説を少しく具體化し、倫理的に發展せしめたものと思はれる。要するに虎關の國家觀は之を仔細に吟味して見ると、皇祖天照大神の降し給へる神勅並に神器の授付は、單に德を以て國土に王たれと仰せられた丈けではなく、此の神勅を奉し、神器を承け傳ふべきものは神孫の他には無く、正統の皇族が之に當らるべきことを指命し、血統を以て王た

れと言ふ絶對的皇統神聖觀を力説してゐるのである。其の思想は佛敎に於ける法性の絶對性といふ理から出發してゐると考へられるのであるが、親房の場合は神の攝理即ち絶對的な神の意志に於ける理を考へたのであつて、その正統記は日本古代の神觀と我國に新に這入つた宋學の精神並に天台の敎學などを混融した思想で書かれてゐる譯で、虎關の元亨釋書よりは時代も遅れてゐるが、思想的にも詳密な解釋が表はれてゐると思はれる。

○

虎關は又我日本が世界的に神聖優秀な國家として尊嚴を誇り得るのは、實に我國が大乗佛敎の純粹に實現されてゐる國柄であると言ふ點であると斷じてゐるのである。この日本が大乗相應の國土であることは、已に大般若經に、「我が滅度の後、後五百歲甚深般若は東北方に於て大に佛事を作す」と示されてある如くで、

印度は小乗多く大乘寡し。震旦は大乘多くして小乗寡し。大乘の支那に於けるや、鼎鼐の一足なり。我が日域は純大にして小なし。其の俱舍成實は學に備ふるのみ、宗を立てず。支那は大醇にして小疵、日本は醇乎として醇なるものなり。(元亨釋書、序說志)

とて之を歴史的に證明を試み、

彼の震旦は三論密亡ぶこと久し。唯識賢首絶ゆるに殆し。佛を言ふもの只三家を全しと爲すのみ。

國家始より傳へ來つて未だ嘗て墮頽せず。其の間弛衰あるものは其の徒の辜なり。我此の土を大乗醇淑の疆と謂ふは誣ひざるのみ。(元亨釋書、諸宗志)

と敍し、「竊かに皇朝の德化を見るに且に佛乘の翼佐に託れるなり」(元亨釋書、資治表序)とも説いて、我國は神國であると同時に佛國であるとの信念を高唱し、彼の文永弘安の外寇即ち元寇の亂に就ても、

我が文弘の二蕃寇、佛神力を戮せて援をなせり。戈矛纔に交れば風浪俄に激し、千艦萬卒一時に破溺す。豈國家の信敬供祀の由る所にあらざるか。(元亨釋書、會議志)

と佛神協力して國を護る所に能く我國の尊威が、正しく強く顯揚される譯で、彼の加茂正傳寺の宏覺禪師が蒙古降伏祈願文の裏に記し残された、

すゑの末、すゑの末まで我國は、萬の國に優れたる國。

てふ和歌の意も、虎關の言ふ所も同じ信念である。蒙古襲來の一事は實に我が國民にかうした自覺を強く深く抱懷せしめ、やがて日本獨自の文化を促進せしめ、我が民族の中に存する國家意識が力強く生かされて來たのであるが、この反省自覺を如實に堂々と表現したのはこの虎關の元亨釋書に於て初めて視はれるのである。釋書の封職志の末尾に、支那では趙宋時代から賣號といつて僧官を賣つて一時の國用を助けたことがある。亂離の時代に時の君主が國用の爲に賣官したのは尙恕すべ

き筋もあるが、沙門が之を買つたといふことは怪しからぬ、「我は姦諛を既に死するに誅するの力を按す」といひ、又「我國家には是等の醜無し。これ特に土俗の醇淑のみにあらざるなり。又佛を奉ずる者、深きが然らしむるか」といふ風なことをも舉げて正しき日本の姿、そこには佛國といふ觀念が基礎づけられ、佛法と王法とは一なりとの信仰に迄進んでゐるのである。この思想は鎌倉時代の末の頃から王法は神道なりと主張され、やがて神國の理想は即ち佛國の理想といふ風にして、王法を守らうとすれば佛法を守れといふ王法佛法相即不二の信仰が發揮され、所謂虎關に於て見る様な興禪護國の大精神が、誠に矛盾なく強張され來つた様である。建武二年に東福寺の地位を五山の末に置かうと奏上する者があつた時、虎關が後醍醐天皇に安福殿に於て拜謁し、其の理由なきことを自ら奏聞し奉つた時の語にも、「竺乾は刹利一種禪讓系連す、故に其の國治まる。支那は是れ一姓ならず、篡奪爭戰す、故に其の國亂る。皇期其れ竺土の如くならんや。百王一種にして未だ改め換ることあらず。此れ我が國の昇平を樂しむ所以なり。夫れ佛法王法は一なり。云々」（海藏紀年錄）といひ、この佛法王法一致して純然たる國體を有つ所の我國の如きは他邦に於て發見することが出來ないのみならず、この王佛不二の國家の形態に逆くの道あらば、それは民族意識に背反することになる。こゝに國粹的自尊の信仰が持續されねばならぬのである。日本の文化は飽く迄も他の模倣であつてはならぬ。それが譬ひ當初は外來のものであつても外國文化の優秀性に對して之

を自己の文化として攝取し消化する所の旺盛な自發覺醒が持たねばならぬことを教へたものが虎關其人に見出されるのである。例へば、彼の夢窓國師が、後醍醐天皇から、天下の僧服を黃色に改めたいと思ふが如何と勅問があつた、けれ共勅意を判斷することが出来なかつたのであるが如何に思はるゝやと虎關の意見を徴した時に、虎關は、近頃の凡僧達で支那から還つた者は「大元の僧服は、梶を以てクラノミ甚に易へて黃色である。これは彼の國の主上の衣は中を尊んで黃色であるから之を僧を尊ぶの意味で僧服に許し、價も廉で他の俗人と區別が付き易い所もある。日本でも之を襲ふならば尊く且つ廉であらう」と稱へ、之を聽く者は、異を好む心から利害を察せずして唱和するのである。陛下も人欲に従はせらるゝ宸斷に出で給うたのであらう。今我國で黃を以て緇に代へるのは、一朝革命の元の君主の意である。何ぞ我が常服を亂して彼の不常の制を追ひ、乍ちにして黃、乍ちにして赤を以てすることが出来ようかと論じ、緇衣の常服は古徳の制で改む可らざることを力説した事が、海藏和尚紀年錄建武二年の條に見えてゐる。この一事を以てしても虎關の日本的意識の精純なことが領かれるであらう。かくの如き精神は虎關の思想生活の全體に涉つて動いてゐるので、其の學術的方面にしても、他の學者宗教家の様に支那新興の程朱學に就ても之をそのまゝに信敬する態度には出でずして、必ず之を批判し、善なるものは皆之を自家藥籠中のものとして之を日本的に活用したのである。蓋し虎關自らは敢て興禪とか護國とかの言辭を弄しはしなかつたにせ

よ、之を事實的に經驗的に結果づけてゐる點は、特に此の時代に於ける虎關の地位を重からしむる所以であらう。

○

史家は常に鎌倉時代は日本民族が人間的自覺の成立した時代で、武士が新なる文化的生活に參與し、自らを意識したと認めてゐる。而して之が意識の向上には禪宗の興起が大なる影響を與へてゐることは否定せられないのである。何となれば修禪は究極に於て自己滅却と同時に更に高い自己の成立を求むる宗旨であるからである。換言すれば、禪は先づ自心を明にし、自己を反省して佛心を自家屋裏に再生し、之を體驗して平生心とするのである。所謂道は自己價値の純粹意識の上に立つのであるから、之を擴充し來るならば自己の國家が更に反省されねばならぬ。我國の價値を體認し我が國の尊嚴さが絶對なものとして信ぜられることは、我が國體の萬國無比であること、即ち肇國邈遠、神器自然、金甌無缺、萬世一系の天皇を戴くことであつて、畢竟、國體の神聖、皇室の尊嚴が國民の意識の中に生動し、凡てをさへげて國と人との一體たることの悦を感ずるのである。この理念は所謂尊皇であり奉公滅私である。之を知的に説明し實證するのは日本國史の任務であつて、虎關の元亨釋書なるものは、その範圍こそは佛教の關係の歴史ではあるが、其の史觀なるものは、佛教精神が我が國土の神聖と融合同化して更に一段の光輝ある文化を形成し、眞の日本精神が反省さ

れ自覺された姿を如實に示さうとしたものである。従つて宗教的普遍性超越性といふ意味は、所謂超國家的にあらゆる國土民族の上に同等一様に流通すると言ふのでは無くて、特殊な國土民族に相應じて、その國土の所有となり、その民族に内在して、渾然として永遠の使命を保持するに在ることを明にしたものと思ふ。即ち虎關に於ける元亨釋書の意圖には、佛教は印度に發り、支那に流傳し、日本に渡來したのであつたが、我が佛教の眞の價値は神國日本獨自の國體と合致し、その大乘的精神を顯現し、釋尊の立教開宗の理想が我が日本國に於てのみ發揮されて所謂純粹不雜の日本精神を啓培したことを告げて、一般敎家國民の自重を喚醒せしむるに在つたと謂ふべきであらうと思ふ。尙虎關に就ては勤王的思想方面其他記すべき點は多々あるのであるが、限りある紙數を超ゆるが故に、今はこゝに擲筆する。

(昭和 一四・一〇・一)

吾禪海。波瀾洪大。無嫌底法。又無著底法。如孔老二道。亦皆兼在于波瀾中。(中略)凡欲知大道。先須見性。若未見性。則不可讀佛祖書。多駭而恠者。因槩謂異端。其爲誣也亦甚矣。

(禪海 一 瀾)